



先月いつも使っているマッキントッシュのコンピューター2400君が突然真っ暗になってから、予備の8100君に代わってもらって早一ヶ月、持ち運べるコンピューターが手元のないというのは実に不自由です。今では公私に渡っての作業をコンピューターにたよっているんで休みでもなんでもちょっとしたことで事務所まで1時間かけていかないとどうにもならない。困ったものです。壊れた方にホームページの控えが入っていたのでホームページの更新もひと休み。新しく性能のいいのはたくさん出ていて買い換えればいいのだろうけれどもそんな金なんかありゃあしない。早く修理から帰ってきてほしいと願うばかりです。

そんな電脳化している私に池袋のサンシャインまで来て手仕事を教えると言う。製本教室の講師をやれと、恩のある人に言われては否も応もなく、針と糸、のりとナイフ

と、ノコギリと金槌のまるっきり手仕事の世界へと立ち向かって行くことになりました。まあ、4月から楽しんでやろうと思っています。しかし手や足を動かしていないと頭も動かなくなりそうです。仕事に追われて缶詰状態ではだんだん頭が働かなくなってきた、仕事も進まなくなります。というわけで明日からちょっと箱根へ行って来ます。スケッチでもしてみたいけれども天気が悪いそうでどーかなー。

こんなに働いているのに全然金にならないので今、一番苦しいのですが、それでもたまに千円札がある時は安飲み屋へ行きます。しかしこのところ、急に荒れるお客を良く見ます。ちょっとしたことで怒り狂ってしまうおじさんたちを見ているとなんだか切なくなります。特に店の人が東南アジアの女の人だったりすると、はじめから優越感でもあるのか大号で、呼びつけたりしているのはしょっちゅうで、本当にこんなことをしていると日本人なんて世界で生き残れなくなってくるようにも思えます。日本人で本当にこういう民族だったのでしょうか。

このあいだもやっぱり突発的に荒れ狂い怒鳴り回って帰った客がいて、じっと黙って立って聞いていた中国の女の子があとで「だって、いつもと同じに、そろそろ店が閉まる時間ですから話ただけなのに。」と後から静かに言っていたが、「よく我慢できたね。かっこよかったよ。」そう言いながら中身がどんどん崩れてゆくこの社会に絶望しそうな気がしていた。また別の日には突然酔ったのが目をつりあげてあわただしく入ってきて「俺のカバンどこへやった。ここにあったやつだよ。どこへやったんだ。」と大声で騒いで結局帰っていったが。酒の上という話ではなく、心の奥底の問題がある。そのあとしばらくこわばった顔をして働いている人に、カウンターの客が酒を頼みながら、「そろそろ機嫌をなおしなよ。」と笑いかけていた。少し救われた。

高級なところへいくとまた違うのだろうが、そんなところは滅多に行けないので、もう、店の人が外国の人というのは当たり前になってしまった。そしてその人たちを見ていると気持ちがいい。みんな、なれない日本語の洪水の中で精いっぱい働いている。その人たちに無意識にでも見下げた態度で接しているとした目の日本人たちをみていると、必ず立場がひっくりかえるなと確信する。日本が近代的な工業国家になって大繁栄したのはいつからだったのか。おじいさんたちはどんな生活をしていたのか。それに比べると今のアジアの人たちの伸びは何倍も早い。

25年前、江戸時代のようなネパールの暮らしの中で「きっと50年後はすごいことになってしまうよ。」といったら「いいえ、何も変わりません、ずーとずーとこのままでした。だからきっと何も変わりません。」と話していたことを思い出した。今、25年目だがすごいことになりつつあるようだ。さて、日本人ってどうするのか。

4月12日から「工作室」は「マイブックメイキング」として池袋のサンシャイン文化センターで行います。両国でもまた体制を立て直してやりたいと考えていますが、今、ちょっと忙しすぎてすぐには出来ないかもしれません。4月からの申込先はサンシャインシティ文化センター事務局 03-3987-2381です。

**TEL/FAX 03-5600-0195 高村 哲**

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

GnomesJpn@aol.com